

複数のマイノリティ性を持つ者のアイデンティティ形成

ー 統合失調症当事者 M の語りから

言語文化研究科言語文化専攻博士前期 2 年 周氷竹

目次

1. はじめに	5. 分析
2. 先行研究	5.1 「統合失調症当事者」に関する語り
2.1 統合失調症当事者の語りに関する研究	5.2 「在日コリアン」に関する語り（省略）
2.2 複数のマイノリティ性を帯びる精神障害当事者 語りに着目した研究	5.3 「性的マイノリティ」に関する語り（省略）
3. 理論的枠組み	6. 考察・まとめ
3.1 アイデンティティ研究とポジショニング理論	7. 今後の課題
3.2 ライフストーリー研究	参考文献
3.3 本研究の目的、意義とリサーチクエスション	
4. 本研究で用いられたデータの詳細	

1. はじめに

統合失調症とは、思考や行動、感情を 1 つの目的に沿ってまとめていく能力、すなわち統合する能力が長期間にわたって低下し、その経過中にある種の幻覚、妄想、ひどくまとまりのない行動が見られる病態である（日本精神神経学会 2015）。

発表者はもともと性的マイノリティの問題に関心があった。また、統合失調症をめぐる諸問題、すなわち統合失調症を持つ人々に対する差別や彼ら自身の語り、そしてその語りに具現化された個々のアイデンティティの問題にも関心を寄せるようになった。2019 年 11 月、性的マイノリティであり、同時に統合失調症でもある在日コリアンの M と知り合うことにより、この複合的な少数派の問題を研究テーマとして設定することにした。M（1972 年生まれ）は 19 歳の時に発病し、統合失調症のため二度の入院を経ている。同時に、M は性的マイノリティであることも自認している。「統合失調症当事者」、「性的マイノリティ」、「在日コリアン」といったアイデンティティが当事者の現実世界に並立して存在することにより、M は「マイノリティの中のマイノリティ」と言えるであろう。

2. 先行研究

2.1 統合失調症当事者の語りに関する研究

統合失調症当事者の語りに関する研究は田中（2000a,2000b,2002a,2002b）、北村（2004）、川岸ほか（2002）、片岡ほか（2003）、岩本（2007）、栄エツコ（2014,2016）、木村（2016）などがあげられる。

以上の先行研究を見ても、ナラティブ単位で、統合失調症当事者の語りの言語的特徴まで取り扱ったものはほぼないと思われる。また、松田（2018）は、当事者が地域で暮らし続ける物語のモデル・ストーリーが共通して見出される傾向があると指摘している。ここでのモデル・ストーリーとは、受苦から紆余曲折の末に価値の転換を経由し障害を受容し、自分らしく自立してゆく道ということである。「当事者の物語がモデル・ストーリー化されて伝わっていくことは、多様さを認め難しくさせ、包摂どころか、条件を満たさないものの排除を招きかねない。社会の中にあっては、条件付き承認のみであることを強化する装置としてしか機能しない恐れを持つと言える。」（2018,156）

2.2 複数のマイノリティ性を帯びる精神障害当事者語りに着目した研究

金（2007）はライフストーリー法を通じ、在日コリアンのエスニック・マイノリティとしての社会的・歴史的 position が、精神障害の発症とどのような関係性を持つのかを、明らかにしている。発表者が調べた限りでは、これ以外に該当する先行研究がほぼ見られない。

以上を踏まえ、本研究はこれまで着目されてこなかった談話的特徴に注目し、統合失調症当事者の相互行為で交渉されつつある、語りで生み出された個々のアイデンティティを分析し、モデル・ストーリーへの抵抗となりうる、複数のマイノリティ性を帯びるストーリーを提示することによって、多様性の承認に与するものである。

3. 理論的枠組み

3.1 アイデンティティ研究とポジショニング理論

研究動向の背景には、アイデンティティを自己や個人を社会と切り離した自律的存在として捉える見方から、社会的に構築された存在であり、社会過程を通して構築されるのがアイデンティティであるという見方に転換してゆく傾向がある。（秦・岡本 2013）

ポジショニングも社会的構成主義を背景とした立場づけの概念である。ポジショニングは共同で作成されたストーリーラインの中で、客観的にも（間）主観的にも首尾一貫した参与者としての自己が会話の場に置かれる談話のプロセスとされている。ポジショニング

理論では、アイデンティティは固定された最終的な産物ではなく、複数の談話的实践を通じて、構成され、また再構成されているもので、相互行為のプロセスで立ち現れるものである (Davies and Harre 1990)。

Bamberg(1997)はポジショニングを三つのレベルに分けて考え、語り手が語りの中で自己を「行う」方法を探り出している。Bamberg によるポジショニング理論では、以下の三つのレベルで分析がなされている (秦 2014)

レベル 1	語りの世界におけるポジショニング → 「物語世界」の登場人物としての「私」
レベル 2	相互行為のプロセスにおけるポジショニング → 対話者と向き合っている語り手としての「私」
レベル 3	その場その時の文脈を離れたとしても成立する社会文化的な背景と結びつくポジショニング

3.2 ライフストーリー研究

ライフストーリー研究は、調査協力者と調査者のインタビューという相互行為を介して生成するライフストーリーを主要な資料として、調査協力者の生活世界なり社会的世界なりの意味を探究する研究方法である。人が個人史を語ることは、単なる自己の表象ではなく、相互行為的且つ行為的なアイデンティティ構築の一側面もある (Georgakopoulou 2006)。つまり、語り手が一方的に聞き手に語ったものではなく、聞き手が誰であるかによって、その内容が変化し、また聞き手はそれを受動的に聞いているだけでなく、共話者 (co-storyteller) としてそのストーリーを発展させることもあるという。

以上を踏まえ、本研究では話者、語り手によるライフストーリーを分析の対象に、ポジショニング理論を援用し、複合的なアイデンティティがいかに相互行為の中で再/構築されているかを明らかにする。

3.3 研究の目的、意義とリサーチクエスチョン

M の語りを通して、マイノリティ性を持つ語りの言語的特徴に注目することで、社会的マイノリティの一員である M がどのような考えを持っているかを明らかにし、相互行為によって構築されるアイデンティティの様々な側面から社会的な現実を読み解くことを本研究の目的とする。

本研究は「統合失調症当事者」、もしくはより広くいうと「マイノリティ」に対する社会的差別、あるいは無理解が存在する、という現状に鑑み、それらを何らかの形で是正することには意義があるという立場をとる。これまでに可視化されてこなかった人の語りに耳を傾け、小さな声を拾い、社会が「統合失調症」などのレッテルを貼った人に対する理解の手助けになることを目指す。また、常に「何事にも自信がない」と言っていたインタビューの M はインタビュー中に幾度も発表者（周）に自分の語りの研究上の価値を確認していた。この意味では、本研究はインタビューの意識を変える可能性があり、本人をエンパワーメントさせるものとしての意義もあるであろう。

本研究のリサーチクエスションは以下の 2 点である。

- ① アイデンティティがカテゴリーによって表象される社会的グループ（統合失調症当事者、性的マイノリティ、在日コリアン）への帰属あるいは反発がいかに関与されるか。
- ② M の語りを通して、どのようなマイノリティの社会的現実が映し出されるか。

4. 本研究で用いられたデータの詳細

本研究で用いるデータは 2019 年 11 月と 2020 年 6 月に二回に分けて収録されたものである。インタビューは発表者で、インタビューは 1972 年に大阪で生まれた M である。M は自分が性的マイノリティであると自認し、統合失調症を持つ。インタビューはインタビューのライフストーリーを語ってもらい、なるべく自然な発話を得られるように構造化せずに行なった。ただし、話の内容が逸れすぎないように、初回のインタビューの開始時や途中で①闘病経験、②自分が性的マイノリティだと自認した経緯、③被差別経験に関する話題を投げかけた。2 回目は前回のインタビューに疑問を感じたところを二度語ってもらった。

5. 分析

5.1 「統合失調症当事者」に関する語り

例 1 初めての発症

- 01 M: あんね、声が聞こえるようになったのは、だから私が 19 歳のときの↑ね。
02 周: はい
03 M: 埼玉にいてて、ある日突然ね、あの（.）何もない空間で、声が聞こえるようにな
04 ったの。
05 周: え::
06 M: そう、
07 周: どういう::
08 M: そのね、うん、だから、男の声なんだけど、男の人の声[↑ね。
09 周: [はい。
10 M: だからその男の子みたいな声とか、それ以外の男の人の声、私の知らない、って
11 いうのが聞こえてきて、で、会話するんです↑よ。一緒に会話を始めるの。

12 周: はい.
 13 M: え:: 私のことを, すごくね, 悪くいうの↑ね. そのことにたえなくなつて, 耐え
 14 きれなくなつ
 15 て, 私ね, 新幹線でね, 鳥取に, 鳥取って知ってます?
 16 周: 鳥取, 知ってます.
 17 M: 中国地方にあるのね. 日本の. そこに逃げたの↑ね, 親戚の家に.
 18 周: はい.
 19 M: で, そこでも, そこにも, すごい, もう, (.) もう戦争みたいなこともあったの
 20 ↑ね.
 21 周: うん.
 22 M: うん. でも↑ね, 私もなかなか思い出したくないんだけどね, そんなことは. で,
 23 すごく, うん, 本当に戦争みたいなことがあって, 私, 一対もう複数の男たちの声
 24 があってね, 私の, 精神はね, すごいもう消耗しきってんね. すごい対決してい
 25 うか, 戦争みたいに, それこそ, そんなんがあつてん↑ね.
 26 周: 鳥取県に逃げたら, そういう声も [聞こえ
 27 M: [聞こえてきの. その埼玉にいてるときからね.
 28 ある日突然あつてんね.
 29 周: はい.
 30 M: で, それからね, 数日後だったかも私逃げたの (.) 鳥取のほうに, もうこれはダ
 31 メだと思って, なんとか逃れたいと思って, 逃れたの. でも, そこでも, やっぱり
 32 あつて, つ 36 いてきてて. なんかね, 時空を超えた戦いやのにね. (..) うん, す
 33 ごいでしょう.
 34 周: そうそう.
 35 M: すごいでしょう↑. こんなん, 聞いたことある?
 36 周: ちょっと (.), ちょっとありますね.
 37 M: あ, あるんだ.
 38 周: 友達は, 前回も言いまして, 統合失調症になって. その友達はなんか電話をかけ
 39 ているうちに, なんか, 他の人が話していると聞いて, そうですね.
 40 M: あ::
 41 周: ちょっと (.) はい.
 42 M: うん, だから統合失調症というのはね, そういう病気みたいなものよ↑ね.
 43 M: でもね, 私はね, 病気とは思っていないの. これは現実にあることだと思って↑ね.
 44 周: うん.
 45 M: ずっと訴えてきてんね, 医者にも, お母さんにも, でも信じてもらえなくって, こ
 46 れ病気だと () 呼びとおされたの↑ね.
 47 周: うん, はい.
 48 M: 他の人たちは実際にあることなのか病気なのかどうかはわからないけど, 私のこと
 49 についてはね, 現実のことな↑の. (.) と私は解釈している.
 50 周: [はい.
 51 M: [うん.

以下では、Bamberg に基づき、三つのレベルに分けて分析を試みる。

① レベル 1：登場人物としての患者 M

M は何もない空間で突然男の声が聞こえるようになった経験を語る時、自分のことをその物語内部に登場する人物とみなし、同じ物語世界 (tale world) に出現するのは絶えず自分と会話する男で、この人たちは M のことを「悪くいう」。そのため、それに耐えられず M は鳥取にいる親戚のところに逃げた。そして、M は物語世界から出て、「もう戦争みたいなこともあったのね。」と言い、物語世界への評価を行なっている。続いて、また自分と複数の男の声が聞こえ、「戦争」のような世界に戻り、それと戦う苦痛さを語っている。こうして、時間と空間を整合した物語世界で自分のことを悪くいう男たちと戦う

Mが構築されてきたといえるであろう。

② レベル2：

a. 統合失調症を持つ当事者 M と、統合失調症を経験したことのない発表者

調査者である発表者は事前に用意していた「初めての発病」という項目を投げかけ始める時点で、そのことによって、インタビューの場での「統合失調症を経験したことのない私」と「統合失調症を持つ、当事者であるあなた」という関係性が提示されていた。

b. 言語、知識上の強者 M と言語、知識上の弱者発表者

15-18 行間で、M は自分の経験を語るとき、大学卒業以降に来日した発表者に対して、日本の地理に関する予備知識を確認していた。この二、三行では、M の相互行為的なアイデンティティは日本生まれ、日本育ちで、日本事情を熟知する知識上の強者で、精神疾患を持つ従来見なされてきた社会的弱者ではなくなり、相互行為的なアイデンティティが即興に構築されたことが確認された。つまり、言語、知識上の強者 M というアイデンティティは日本語母語話者でない対話者によって構築されたものだと言える。

③ レベル3：「病気」というレッテルへの反発を抱く M

Holmes (2006) は個人間の(interpersonal)アイデンティティとグループ間の(inter-group)アイデンティティの構築的側面のプロセスに絶え間なく従事していることと主張している。すなわち、アイデンティティの構築プロセスには、個人間の相互行為において構築される側面と、各人の所属するグループに基づいて構築される側面があると言うことができる。M は発表者に、自分の経験と類似することを見聞きしたか否かと聞き、それに肯定の答えを与えた後、発表者は自分の友人も他者の声が聞こえるといい、M はすぐに発表者がその友人の経験したことを幻覚だと解釈したことを意識し、自分の感覚が幻覚ではなく現実であると述べた。ここでは、幻覚や妄想などが代表的な症状である統合失調症を持つ患者というレッテルへの反発、しいてはカテゴリー化されることへの反発、拒絶が示されたといえる。

De Fina (2006) が指摘するように、相互作用の中で表出、実行、競争、または議論されるアイデンティティは、社会的グループとカテゴリーの特性およびそれらに属することがもたらす影響に関するイデオロギーと信念に基づいている。このようなイデオロギーと信念は、複雑な形で具現化され、社会的行為者によって生み出された対話の根底にある。その場その時でのアイデンティティ表出は、社会的グループによって構築される、より一般的なアイデンティティに複雑な方法で絡み合っている。M は統合失調症の症状と、そ

れが故にもたらされた苦痛さを認めつつ（「だから統合失調症というのはね、そういう病気持ちなのよ↑ね.」、「私の、精神はね、すごいもう消耗しきってんね.」）、「統合失調症当事者」というグループの一員になることへの拒否が示されている。ここで M が反発したいのは統合失調症を持つ患者というレッテルのみならず、常に患者というレッテルに伴うスティグマ、つまり負の社会的烙印といえるだろう。

ある個人が「病者」として生きるのか、それとも「正常人」として生きるのか、その人の状態によるものではなく、その個人を受け入れる社会の許容度による。（上野 2015,403）M の語りを窓口にし、M の感じできた世間に広まっている精神障害者に対するスティグマが窺えるといえよう。

5.2 「在日コリアン」に関する語り（省略）

5.3 「性的マイノリティ」に関する語り（省略）

6. 考察・まとめ（リサーチクエスション①②に対する解）

M の語りから、登場人物としての患者 M、言語、知識上の強者 M、統合失調症を持つ当事者 M といったアイデンティティが即興に構築されたことが確認できた。M の流動するアイデンティティを実証できたといえる。また、M は「統合失調症当事者」というレッテルから距離を置きながら、自己経験の特殊化、個性化をする語りによって、「統合失調症当事者」というレッテル、また、こういったレッテルに常にまつわるスティグマへの反発が示されている。こういった反発から、M の感じできた、世間に広まっている精神障害者に対するスティグマが窺えるといえよう。さらに、統合失調症を否認する語りを通じ、M がこういったスティグマを内在化しつつ、スティグマを再生産しているのではないかと考えられる。

7. 今後の課題

5.2 と 5.3 の分析を完成した上で、更なる分析を行う。また、映し出された社会的現実と直面している M の個性・主体性がいかに体现されるかも分析の視野に入れようとする。

トランスクリプト記号

(.)	短いポーズ、0.5 秒以上は(..)	句読点	句点は文の切れ目、読点は語句の断続を明らかにする息継ぎ	:	伸ばした声
?	疑問形の上昇イントネーション	┌	発話の重複の開始箇所	下線部	発表者による分析上の強調
↑↓	イントネーションの上昇と下降	...	言い淀み	@	笑い
(文字)	発表者による補足				

参考文献（抜粋）

上野千鶴子 (2015) 『差異の政治学 新版』岩波書店：東京.

桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

秦かおり(2014) 国外在留邦人が語る東日本大震災:対面の場における意見交渉の過程とアイデンティティ表出を分析する.言語文化研究, 40, 123-142.大阪大学.

松田康子(2018) 精神障害者当事者の経験に着目した質的研究に関する批判的検討：障害者臨床心理学の着想. 北海道大学大学院教育学研究院紀要, 132, 149-165.

Bamberg, M (1997). Positioning between structure and performance. In Michael Bamberg (ed.).

Oral versions of personal experience: three decades of narrative analysis, Journal of Narrative and Life History, 7, pp.335 - 42.

De Fina, A. (2006) Group identity, narrative and self-representations. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg(eds.) Discourse and Identity, pp.351-375. New York: Cambridge University Press.

Georgakopoulou, A. (2006) Small and large identities in narrative (inter)action. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg(eds.) Discourse and Identity, pp.83-102. New York: Cambridge University Press.

Holmes, J. (2006) Workplace narratives, professional identity and relational practice. In A. De Fina, D. Schiffrin and M. Bamberg (eds.) Discourse and Identity, pp.166-187. New York: Cambridge University Press.

https://www.jspn.or.jp/modules/advocacy/index.php?content_id=59 公益財団法人 日本精神神経学会 ホームページ